「白雪姫」

昔むかし、ある冬のさなかのこと、雪が鳥の羽のように空からふっているとき、女王が、黒い黒檀の窓わくのある窓辺にすわって、縫い物をしていました。縫い物をしながら雪のほうを見たとき、針を指にさして、血が三滴雪の上に落ちました。まっ白い雪の中の赤い血がとても美しかったので、女王は、

「この雪のように白く、この血のように赤く、この窓わくのように黒い髪の子どもがいたらいいのに」と思いました。

それからまもなく、女王は女の子を生みました。その子は雪のように白く、血のように赤く、黒檀のように黒い髪をしていたので、白雪姫と名づけられました。

『語るためのグリム童話３』小澤俊夫監訳　小峰書店

印象的な語りだしです。白と黒と赤。鮮やかな色の対比が見られます。これは美しさを象徴的に表しています。

「きもだめし娘」

さて、三番めの若者は、かまどの火たきをしていましたが、これをきいて、

「よし、それなら、おれがみとどけてやる」と、娘の部屋に行きました。

若者がそっとのぞいてみると、白装束に黒髪をふりみだした鬼のような女が、血だらけのあかんぼうの頭をばりばり食べているところでした。若者はびっくりしましたが、おちついてよくみると、鬼のお面をかぶった娘が、おもちでこしらえたあかんぼうの人形を食べているのでした。血と思ったのは、赤い絵の具の紅殻でした。

『日本の昔話１』小澤俊夫再話　福音館書店

これも白と黒と赤です。ここでは恐怖の色彩です。が、美しくもありますね。

「きつねと熊」

二、三日して、熊がきつねの家へ行ってみると、まっ白なふといだいこんと、まっ赤でうまそうなにんじんと、みごとに長いながいもがありました。熊はこれをみて、

「はてな、きつねどん。なんだかおまえ、いいほうばかりとったんじゃないかね」といいました。

『日本の昔話４』小澤俊夫再話　福音館書店

白と赤ですね。「にんじんとごぼうとだいこん」も、赤・白・黒と原色で表現されます。

「ひひ神退治」

「これは、旅の六部どの。まあ、おききください」
長者はそういって、わけを話しました。
「じつは、この村では毎年、お米の刈り入れがすむと、村の八幡さまに若い娘をひとり、人身御供にささげなくてはならないことになっています。夜中に、屋根に白羽の矢がたつと、その家の娘が人身御供になるきまりなのですが、それが今年はとうとう、うちの屋根にたってしまいました。

『日本の昔話４』小澤俊夫再話　福音館書店

白羽の矢。白という原色であること、矢という鋭いものであること、たった一本であること。くっきりとして孤立的ですね。

「朝日三郎の地獄めぐり」

それからまた、どんどん、どんどん歩いていくと、山がありました。三郎は、どんどん、どんどんのぼっていきました。すると大きな門がありました。三郎が門の前にたつと、赤鬼や黒鬼がでてきて、
「や、人間が来たぞ。とって食おう」というので、三郎は、
「われこそは、朝日三郎だ。鬼に食われるおれではない」とさけんで、鉄の棒をぶんぶんとふりまわしました。

『日本の昔話４』小澤俊夫再話　福音館書店

鬼の色です。鬼は架空の存在でだれも見た者はいませんが、黒一色、赤一色というのは極端ですね。

「魚がくれた子供」

何か月かたつと、ばあさまと雌犬と雌馬はいっしょにみごもった。それからまた何か月かたつと、子供が生まれた。男の子だった。それに犬の子と雄の子馬も生まれた。男の子はとてもかわいらしかった。これほどかわいい子はどこにもいなかった。子犬はまっ白で、子馬もまっ白だった。もうひとり子供が生まれ、もう一匹子犬も生まれ、もう一頭子馬も生まれた。

『世界の民話⑪アメリカ大陸Ⅰ』中村志郎・青山隆夫訳　ぎょうせい

南米チリの昔話。他の色は少しも混じっていない純白のイメージです。極端です。